

2 社会

実社会とのつながりを意識した社会的思考力・ 判断力・表現力を高める社会科授業の進め方

橋本 正輝

本論の要旨

課題に対して、思考ツールを活用し、資料を整理・分析の上、自分の考えと理由をまとめると同時に、他者との交流を通して、よりよい考え・方法を判断し深めていくことで社会的思考力・判断力・表現力を高めていくことができるであろうと考えた。また、課題を設定していく際に、実社会と自分たちとの生活とをつなげた。

本年度の研究では、ディスカッション課題や単元を貫く問いを設定し、グループや学級全体での交流を通して、自分の考えを深めさせることができ、社会的思考力・判断力・表現力が高められた。また、実社会とのつながりを意識した課題設定を行ったことで政治に対する関心の高まりが見られ、単に知識として政治や経済について学んだのではなく、これらを自分事としてとらえて考えることで、社会への関心が高まったと考えられる。

キーワード 実社会、思考ツール、社会的思考力・判断力・表現力

1. はじめに

本年度の本校研究主題は、「実社会に生きてはたらく力の育成」である。社会科とは社会のことを学ぶ教科であり、一人ひとりが社会に対して関心を高め、実際に社会参画をしていくために考えていく力を育てていくことが大切であると考え。そして、実際に社会参画をしていくためには、まず課題を知り、その課題に対して必要な情報を収集・整理をしていき、自分の考えをまとめていく力や自分の考えを他者へ伝えていく力、他者の考えを聞き、よりよい方法を判断し行動につなげていく力を高め育てていくことが必要であろう。

昨年度は、課題に対して資料をもとにまとめた考えを小集団や学級全体で交流することで、自身が持つ視点だけにとどまらない視点の広がりから新しい課題を設定していく力を育てることで社会的思考力・判断力を高める授業を進めた。その際に、マトリクスやマッピングシートなど様々な思考ツールを用いることで思考を深めさせることが社会的思考力・判断力を高める有効な手段の1つとなったが、その一方で学習内容を実際の生活とつなげていく面では十分とは言えなかった。

では、本校生徒はどれだけ社会、特に政治に対して関心を持っているのだろうか。

図1は、内閣府が行った「平成25年度我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」の結果の一部である。これと同様の調査を本年度4月に本校3年生に行った。その結果は図2のとおりである。

Q：今の日本の政治にどのくらい関心がありますか。

非常に関心がある	9.5%
どちらかといえば関心がある	40.6%
どちらかといえば関心がない	25.6%
関心がない	16.9%

Q：社会をよりよくするため、私は社会における問題に関与したい。

そう思う	8.1%
どちらかといえばそう思う	36.3%
どちらかといえばそう思わない	25.1%
思わない	12.5%

Q：私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかも知らない。

そう思う	6.1%
どちらかといえばそう思う	24.1%
どちらかといえばそう思わない	29.9%
思わない	21.2%

Q：私個人の力では政府の決定に影響を与えられない。

そう思う	27.6%
どちらかといえばそう思う	33.6%
どちらかといえばそう思わない	18.4%
思わない	9.4%

図1 「若者の意識に関する調査」の結果（一部）

図1・図2を見ると、本校3年生は、日本の青少年と比べて、政治に対して関心を持ち、社会にかかわっていきたいと考えている傾向が見られる。

しかし、3分の1程度の生徒は政治に関心がないと回答し、4分の1程度の生徒は、自分の力では政府の決定は変わらないと考えている。

Q：今の日本の政治にどのくらい関心がありますか。	
非常に関心がある	14.7%
どちらかといえば関心がある	46.6%
どちらかといえば関心がない	31.0%
関心がない	5.2%
Q：社会をよりよくするため、私は社会における問題に関与したい。	
そう思う	14.5%
どちらかといえばそう思う	47.0%
どちらかといえばそう思わない	22.2%
思わない	13.7%
Q：私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかも知らない。	
そう思う	9.4%
どちらかといえばそう思う	21.4%
どちらかといえばそう思わない	29.1%
思わない	33.3%
Q：私個人の力では政府の決定に影響を与えられない。	
そう思う	47.0%
どちらかといえばそう思う	27.4%
どちらかといえばそう思わない	12.8%
思わない	6.8%

図2 4月に本校3年生に行った調査の結果

本校3年生は、政治に対する関心は高いが、あくまでテレビや新聞による知識からとらえている傾向が見られ、まだまだ実際の政治と自分の生活とのつながりを見いだせていないのではないかと考えた。

そのため、本年度も、学習課題に対して思考ツールを活用して、資料を整理・分析をしていくことで課題に対しての自分の考えと理由を文章にまとめていく。同時に、交流を通して、他者の考えや理由を知ること、ただ、学習課題について考えるだけではなく、そこからさらに学習課題を見つけ深めていくことで社会的思考力・判断力・表現力を高めていく授業づくりを進めていく。その上で、学習課題を設定していく際に、実社会とのつながりを考えた学習課題を意識して行うことで、実社会と自分たちの生活のつながりを意識させていきたい。様々な資料や情報・考えをつなげていくことによって思考力・判断力・表現力を高めていくと同時にその力をいかに実社会とのつながりを意識させていくかを考えた授業づくりを進めていくことを本年度の研究としたい。

2. 研究の目的

与えられた学習課題に対して思考ツールを活用して、資料を整理・分析をし、自分の考えと理由を文章にまとめさせる。さらに、意見交流やプレゼンテーション活動を通して、他者の考えや理由を知ること、そこからさらに学習課題に対する考えを深めさせることで社会的思考力・判断力・表現力を高めさせる。学習課題については、政治や経済、国際関係など、実社会とのつながりを考えたものを意識して設定することで、実社会と自分の生活のつながりを意識させ、社会参画への関心を高めることを研究の目的とした。

3. 研究方法

思考力・判断力・表現力を高める手段として、課題に対して思考ツール（Tチャート、四象限チャートなど）を活用し、自分の考えや理由をまとめさせた。さらに、まとめた考えを2～5人単位の少人数で交流を行う「交流タイム」や学級全体交流を行うことで、自分の考えを他の生徒に説明させる機会や聞く機会を持つ。その際に、交流したことをさらに深めていくために、聞く側の生徒もただ聞くだけで終わるのではなく、!?マトリクスなどの思考ツールを用いて、「よく分かった、納得できた」と「よく分からなかった、疑問点がある」という視点で整理しながら他者の意見・理由をとらえ、自分の考えを振り返り、新たな課題設定が行えるようにした。

また、課題設定では、時事的な事柄や将来生徒自身に関わる事柄を用いることで、実社会とのつながりを意識した課題を設定することにした。その際、1つの題材について議論やプレゼンテーションを行う課題（ディスカッション課題）や1つの単元を通して考える問い（単元をつらぬく問い）を設定していくよう意識した。

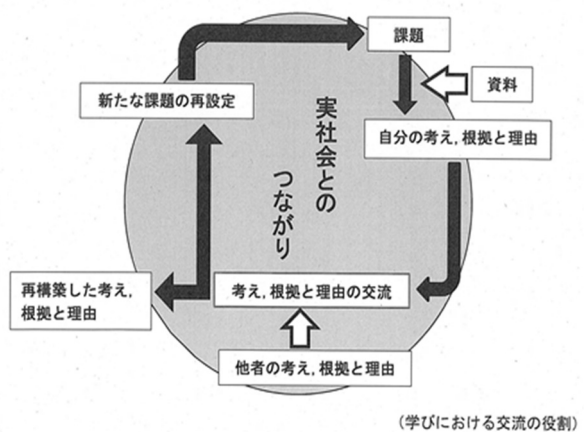


図3 研究テーマの構造図

4. 実践事例

本年度、実社会とのつながりを意識して設定した課題の一部を次に挙げる。

単元名	課題
歴史的分野「日本の領土をめぐる問題について考えよう」	ディスカッション課題として、北方領土問題について、70年後の日本を考えたとき、ロシアとの間でどのような合意を目指すべきかを考え、交流を行う。
公民的分野「日本国憲法と基本的人権」	単元を貫く問いとして、基本的人権は本当に保障されているのかの問いを単元ごとにまとめ、これからの社会に必要な「新しい人権」とは何かを考え、交流を行う。
公民的分野「公共の福祉」	ディスカッション課題として、Aさんの店舗の立ち退き問題を4つの立場からとらえ、立ち退きの可否について考え、交流を行う。
公民的分野「模擬裁判」	ディスカッション課題として、1つの裁判例をもとに、裁判員の立場として判決を考え、評議の形で交流を行う。
公民的分野「選挙の意義としくみ」	単元を貫く問いとして、選挙の原則、選挙制度の課題、模擬投票を通して、有権者としてどのように政治に参加すべきかを考える。
公民的分野「わたしたちの生活と税」	単元を貫く問いとして、財政、税の種類、時事課題を通して、私たちが納める税金の望ましいあり方について考え、交流を行う。
公民的分野「企業が目指すものとは何だろう」	ディスカッション課題として、企業の利潤の再分配を考え、交流することを通じて、企業

	が大切にすべきことを考える。
公民的分野「現代の雇用」	ディスカッション課題として、女性の雇用増加のための対策を考え、交流を行う。

単元を貫く問いを設定していく際に意識したことは、何時間かの学習を通して最後に1つの考えをまとめていくため、それぞれの単元での学習の際に考えたことを最後に振り返りやすくするための思考ツールを使用することである。本年度は、Tチャートやフォーカスマップを用いることで自分の考えを整理させた。

「わたしたちの生活と税」の単元では、単元を貫く問いとして「私たちが納める税金の望ましいこれからのあり方とは？」を設定し、3時間の授業を通して税金の望ましいあり方について考え、まとめさせることをした。

税金は、生徒も商品を購入する際には消費税を負担している。しかし、納税者として税金の種類や使われ方について意識している生徒は少ない。実社会とのつながりを意識させる上においても大切な単元の1つと考えた。

税金についての学習では、この単元に入る前に、税理士の方を講師とした「租税教室」を行った。実際に税に関わっておられる方の話を直接聞くことで、教員の授業とは違う形で税について考える機会となったと言える。

租税教室での学習を基に、「財政のはたらき」では、歳出の変化について資料から読み取り、今後の財政について考えることで税のあり方を考えさせた。「国の収入を支える税と国債」では、累進課税制度への賛否を考え、議論することで税のあり方を考えさせた。「わたしたちの生活と税」では、時事的な内容を課題に設定した。いわゆる「イートイン脱税」について8%での購入者・周りの方々・店員の3つの立場についての意見を考えた上で、改善点を考えさせ議論していく中で税のあり方を考えさせた。

それぞれの課題では自分の考えを理由とともにまとめ、交流を行うことで他者の意見を聞き、自分の考えを再考させた。

生徒の論述を見ると、「国として色々な対策をしていった方が良いと思うし、私たちもこれらについてたくさんの意見を出していけばもっとよりよい制度が生まれるのではないかと思います。」「無駄遣いをなくし、必要な事項のみに使われているか国民が常に興味を持ち、監視し、自分の意見を反映さ

せていくことが大切。」などの記述が見られた。

同じ税についてはあるが、異なる学習内容に対して同じ問いでまとめていくことを行うことで1時間の学習だけでは深めることができなかつた考えをもち、新たな課題を見つけることができたと言える。

【わたしたちの生活と税】

日本国憲法第30条「国民は、法律の定めるところにより、納税の義務を負ふ。」

◎私たちが納める「税金」の望ましいこれからのあり方とは？
【財政のはたらき】(税金の使い方)

税金は、国が私たちの生活をよりよくするためにあるのだと分かった。しかし、他にもよい使い方ができるとも思える。使い方があつたり、節約できる部分があると思うので、徹頭徹尾に優先順位を立てて使うべきだと思う。

税金には色々な種類があつた。軽減税率の制度を初の中にも、果は税金は、世界的な理解が向により深くなつてきた。可能性があるので、より使い方を工夫するべき。	軽減税率の制度を初の中にも、果は税金は、世界的な理解が向により深くなつてきた。可能性があるので、より使い方を工夫するべき。
---	---

【国の収入を支える税と国債】(税の種類) 【わたしたちの生活と税】

※私たちが納める「税金」の望ましいこれからのあり方とは？

まず、税金は、私たち国民の生活をよりよくするためにあるという事が分つた。私たちが税金を支払ふのは、私たちの生活をよりよくするために、私たちのためだと思つた。だからこれからは、自らが税金をしっかりと納め、その納税の制度もしっかりと理解するべきだと思つた。また、税金の使い方もよく考えていかなくてはならないと思つた。

図4 生徒がまとめたTチャート

社会的思考力・判断力・表現力を高めるためには、課題に対して必要な資料を整理し、その整理された資料から自分の考えを理由とともにまとめていくことが大切である。さらに、考えを他者と交流していくことで自分の考えを深めていくことや新しい視点を持つことも大切である。

そのために、いくつかの視点が生まれ、議論が進むような課題であるディスカッション課題を設定していくことを試みた。

また、ディスカッション課題に対して、資料を整理するには、思考ツールを活用することが有効なのは過去の実践からも明らかであり、本年度は、四象限チャートやXチャートなどの思考ツールを活用した。さらに、交流の際にも、気づきや疑問を整理するため、!?マトリクスなどの思考ツールを活用した。

ディスカッション課題として、「模擬裁判」を実施した。実施する前時には裁判員制度について学習し、将来だれもが裁判員に選出され評議に参加する可能性を示すとともに、裁判員の辞退率が高まっていることを挙げ、その課題解決の方法を考えることで、裁判員制度での「裁判」を意識させた。

「模擬裁判」では、1つの裁判例を示し、有罪・無罪を各自で判断させた後に、5人グループで互いの考えを交流・議論させた。普段は4人グループのところを5人グループにしたのは有罪・無罪の結論を出させるためである。その後の全体交流では、例えば、有罪であつたグループでは最初に無罪と考へていた生徒に、「どのような議論が行われたのか。」、「議論の中で、誰の意見に納得し、疑問を持ったのか。」「どうして有罪という結論に達したのか。」を説明させるなどを行い、グループでの議論の過程が分かるようにさせた。

まとめの中で、同じ証言や証拠に対してとらえ方が自分と異なつたことや違つたとらえ方になるほどと思うところもあつたこと、意見をすり合わせることの難しさを記入する生徒が見られた。議論を通じて、他者の考えに触れ、自分の考えを振り返ることができたと言える。

次に示す事例は、本年度5月の校内研究会・公開授業にて3年生で実施したもので、ディスカッション課題として設定したものである。

北方領土問題について、2年生の地理的分野での既習内容を踏まえながら、日本やロシアの立場について資料から読み取り、自分の考えを示し、グループや全体の交流を通じて、再度自分の考えを整理し、まとめることを目標とした。さらに、日ロ交渉において北方領土が議論されていることから、歴史と実生活を結びつけることで生徒にもこの問題を自分事として意識をしてほしいと考え、題材に取り上げることとした。

公開授業での学習過程は次の通りである。

	学習内容・活動	○指導 ◆評価 ★主体的に課題を見いだす方策
導入	1. 写真を見て、学習を振り返る。	○以前の学習を振り返らせるとともに、現在すすめられている日露交渉について知らせる。
展開	学習課題 70年後の日本を考えたとき、ロシアとの間でどのような合意を目指すべきか。	
	2. ポツダム宣言受諾後の日本の領土変化について知る。	○要点を板書し、基礎知識としてとらえさせる。
	3. 北方領土の返還合意として目指す方向について考える。	○他人ごとの話ではなく自分ごととしてとらえさせる。

	<ul style="list-style-type: none"> ・資料をもとに、自分の考えを四象限マトリクスに整理する。 ・交流時に説明する理由を論述する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○四象限マトリクスを用いて、自分の考えを示させる。 ○根拠とともに理由を示せるように指示をする。 ★資料から、自分の考えを四象限マトリクスに整理し、その理由を論述させる。 ◆【思考力・判断力・表現力等】（ワークシートへの記入）
4.	4人グループでの交流を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・他の人の発表を聞きながら、Tチャートに「なるほど」「どうして」をメモしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○グループ内での交流が進むよう、机間支援の中で交流を促す。 ★Tチャートを使って、他の人の主張を整理させる。 ★自分の主張を根拠とともに示し、伝えさせる。 ◆【思考力・判断力・表現力等】（ワークシートへの記入）
5.	黒板の四象限マトリクスに自分の考えを示す。	<ul style="list-style-type: none"> ○黒板に四象限マトリクスを貼り、各自の考えを示させる。
6.	クラス全体で交流を行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・他の人の発表を聞きながら、Tチャートに「なるほど」「どうして」をメモしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○四象限マトリクスを見て、さまざまな立場の意見が引き出せるようにする。 ★Tチャートを使って、他の人の主張を整理させる。 ★自分の主張を根拠とともに示し、伝えさせる。 ◆【思考力・判断力・表現力等】（ワークシートへの記入）
ま と め	7. グループやクラスでの交流をもとに、再度自分の考えをまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ○根拠や考えがしっかりと説明できるよう、論述を促す。 ★意見交流をふまえて、自分の立場を明確にし、意見や考えをTチャートにまとめさせる。 ◆【思考力・判断力・表現力等】（ワークシートへの記入）

今回、「北方領土の現状や日本の領土をめぐる情勢」、「元島民の思い」、「北方領土に住むロシア人の思い」を資料として北方領土の返還のあり方について考え、グループでの交流と学級全体での交流を行っ

た。



図5 グループでの交流の様子

今回の授業では、交流を通して、自分の考えを深めることで、社会的思考力・判断力・表現力を高めることを目的としたが、一定の成果はあったと考える。それは、授業後に行ったアンケートにおいて、「根拠を持って自分の意見を持てた」生徒の割合が、97.2%であり、「自分の意見を他の人に論理的に伝えることができた」生徒の割合は86.1%、「意見を比べながら深めることができた」生徒の割合は94.4%であったことから分かる。

さらに、「この授業で、課題や疑問に残ったこと」として、「ロシア側の主張を裏付けている根拠とは何か。」、「ロシアと日本の法律にはどのような違いがあるか。」、「ロシアと上手く話し合うためにはどうしたらいいか。」、「実際に返還されたとしてもそうでなかったとしても、今後の国交がどうなるのか。」などの課題・疑問を挙げたことをみると、新たな課題の設定と実社会とのつながりという側面でも成果が見られたと言える。

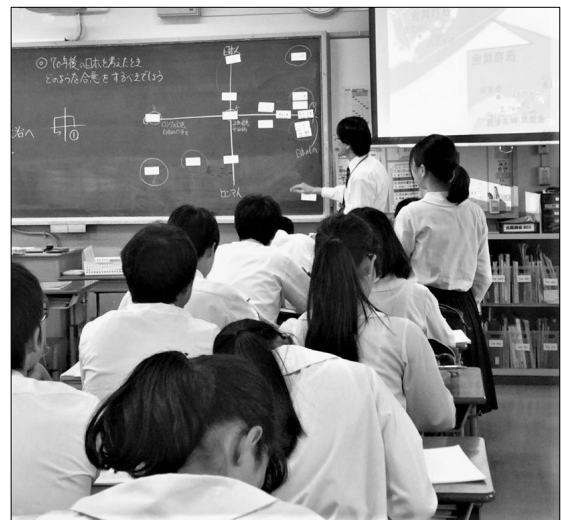


図6 四象限チャートを用いての全体交流の様子

5. まとめ

図7は、4月に行った意識調査と同様の項目で本校3年生へ12月に行った調査の結果である。この結果を見ると4月に比べて、「今の日本の政治にどのくらい関心がありますか。」の項目では、関心ある生徒の割合が8.0%、その中でも「非常に関心がある」と答えた生徒の割合は8.7%と増加した。また、「社会をよりよくするため、私は社会における問題に関与したい」と考える生徒の割合が9.5%、「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」と考える生徒の割合が9.4%と増加した。このことから、本年度の学習を通して政治への関心は高まったと考えられる。

実社会とのつながりを意識した課題設定を行ったことで単に知識として政治や経済について学んだのではなく、自分事としてとらえて考えることで、関心が高まったと言える。

Q：今の日本の政治にどのくらい関心がありますか。	
非常に関心がある	23.4% (14.7%)
どちらかといえば関心がある	45.8% (46.6%)
どちらかといえば関心がない	20.6% (31.0%)
関心がない	8.4% (5.2%)
Q：社会をよりよくするため、私は社会における問題に関与したい。	
そう思う	19.6% (14.5%)
どちらかといえばそう思う	51.4% (47.0%)
どちらかといえばそう思わない	20.6% (22.2%)
思わない	5.6% (13.7%)
Q：私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかも知らない。	
そう思う	13.1% (9.4%)
どちらかといえばそう思う	27.1% (21.4%)
どちらかといえばそう思わない	26.2% (29.1%)
思わない	23.4% (33.3%)
Q：私個人の力では政府の決定に影響を与えられない。	
そう思う	35.5% (47.0%)
どちらかといえばそう思う	33.6% (27.4%)
どちらかといえばそう思わない	14.0% (12.8%)
思わない	9.3% (6.8%)
※ () 内の数値は、4月に行った調査の結果	

図7 12月に本校3年生に行った調査の結果

ただ、本年度は、3年生での実践であり、その学習内容が、歴史的分野の近現代史と公民的分野ということもあって、実社会とのつながりを意識した課題の設定が行いやすかったと言える。今後、地理的分野や歴史的分野の近世までの学習において、どのような実社

会を意識した課題を設定していけるかを考えていきたい。

また、意識調査では、「あなたの今住んでいる地域(市町村)が好きですか。」という項目において、「好き」と回答した生徒の割合は、82.9%から84.1%と増加したが、「将来もずっと今の地域(市町村)に住んでいたいと思いますか。」という項目では、「住んでいたい」と回答した生徒の割合が、18.4%から14.0%と下がった。地方自治において実社会とのつながりを意識した課題設定を考えていき、地域とのつながりの意識を高める課題についても考えていきたい。

参考文献

内閣府「平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」、平成26年6月
 文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集—思考力、判断力、表現力等の育成に向けて 中学校版」、平成23年5月
 橋本正輝「交流を通じた社会的思考力・判断力を高める社会科授業の進め方」、『滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要61』、滋賀大学教育学部附属中学校、平成31年3月